

『オールド・オーク』(ケン・ローチ)

「これが最後の作品になるだろう」

イギリスの映画監督、ケン・ローチも89歳になる。私は長年、ケン・ローチの作品を見てきたが今回の作品はイギリスの北東部の炭鉱町にシリア難民が押し寄せてくることにより引き起こされる混乱、葛藤、交流、相互理解を描いていた。

私事であるが、以前、2016年のシチリア旅行で、カターニャの修道院(大学院になっていた)を見学した際にシリア難民でないが、シリア留学生と出会ったことがあった。その経験をこの映画を見た時、いつも映画の中のシリア人難民サラにそのイメージを重ねて見ていた。回廊を見て、帰ろうとすると、シリア人の若い女性(シリア出身で、この大学生のようだった)のロサーラが館内を案内してくれると言う。広大な構内を全て、1階から2階、屋上、地下まで案内してくれた。「シリアは大変ですね」と聞くと、彼女は「ボンパ」と答えた。どのような経緯でカターニャに來たのだろうかと思ったが、私の会話力では詳しい事情を聞きことはできなかった。彼女はこの大学で歴史学を学んでいて、大学ではガイドの資格が取れると言っていた。この旅の最後を幸せな出会いで締めくくられてよかった。

2015年の難民危機のイギリス北東部

2015年にイギリスの北東部の小さな町に難民が押し寄せてくる。古いパブの「オールド・オーク」を営むTJ(ディブ・ターナ)は彼らに同情的だが、店の常連たちは反発を隠さない。難民の一人ヤラ(エブラ・マリ)と親しくなる。閉めきっていた店のホールを難民と地域の恵まれない人たちのための食堂として開放することにした。食堂はにぎわうものの、常連たちのいらだちが募っていく。

だが、難民たちを毛嫌いし、ヤラに心ない言葉を浴びせる常連客を一方的に断罪することはない。炭鉱の労働者だった常連客や家族は、組合で団結して炭鉱閉鎖に抵抗した歴史がある。閉鎖後の町は疲れ果て、人口流失で増えた空き家は安値で外国人に買いたたかれ、積る彼らのやり場のない怒りと無力感を等分に描き出す秀作だ。

オールド・オークの店主TJとシリア人難民ヤラ

店主TJはかつて地域活動に熱心だったが、今は問題を抱えていて、葛藤を体現する。物語の核心を体現する人物はシリア人難民サラだ。難民キャンプで国際ボランティアとともに英語も学び、独学で写真

国際ボランティアとともに英語も学び、独学で写真を学んだ女性だ。経験を共有し世界観を広げた彼女とTJの友情が物語の核となる。

これまで映画のパンフレットからケン・ローチのインタビューを引用してきたが、他にもたくさん興味深い言葉がある。いくつか引く。

＜村にやってくる

シリア人家族を

どう描きたかったか＞

「原則は常に同じです。

がありのまま自分であり続けるようにすることです。」

「キャスティングは重要です。映画に登場するシリア人は、この地域に居住するする人々であるのは明らかです。」

「脚本は彼らに自由に貢献する余地を与え、物語が彼らの体験を真に反映したものとなるよう配慮しました。」

「人々はそれぞれ異なります。伝統的家庭もあれば、そうでない家庭もありました。英語を習得した人もいれば、そうでない家庭も苦勞した人もいました。」

「シリア人以外の出演者は全員地元のコミュニティから集めました。シチリア人の存在に対するさまざまな反応を表現出来るからです。」

「人々の多様性」を見つめるケン・ローチの映画作りには一貫して、感銘深い。



紹介 「少年は見た・B29 撃墜の現場を」

「反天皇制市民 1700」No59 (2026/5)

松岡勲さんが、和歌山県田辺市龍神村の小久保健さんと交流の記録「少年は見た・B29 撃墜の現場」を寄稿された「反天皇制市民 1700」に寄稿され、5月に発行された。

小久保さんが国民学校2回生の時、1945年5月5日にB29が山中に撃墜された。警防団を中心に遺体と遺品の回収が行われて5遺体が埋葬された。地区では戦前から慰霊祭が続けられている。小久保さんは戦死した米兵の遺族を探す運動にも加わって活動。

**頒価:500円/事務局に連絡を

